

徳島市埋蔵文化財調査報告書第5集

名東遺跡第2次調査概報

—1978年度—

1979

徳島市教育委員会

名東遺跡第2次調査概報

—1978年度—

1979

徳島市教育委員会

序

名東遺跡は古くから、弥生時代の集落跡として、知られておりました。今回の発掘調査は、市営住宅建て替えに伴うものでしたが、「開発と保存」という問題をも内在させていました。

本遺跡は、鮎喰川下流域の東岸の沖積低地上に立地しており、南側の眉山北西麓に展開する名東古墳群、鮎喰川西岸の弥生時代の大集落跡と考えられている矢野遺跡、気延山東山麓を中心に展開する気延山古墳群、本年度より調査の端緒がつけられた阿波国分寺跡などの重要な遺跡が展開しています。このような、原始・古代の徳島の中心地の一角をしめていた名東遺跡の調査によって、弥生時代から古墳時代にかけての大集落跡の存在の可能性が大となり、鮎喰川下流域における文化の変遷過程を知る上に貴重な資料を提供してくれたものと思われます。

最後に調査にあたって、ご指導・ご助言をいただいた文化庁の水野正好先生をはじめ、地元の研究者の方々に対して深く謝意を表します。

昭和 54 年 3 月 31 日

徳島市教育委員会

教育長 富 永 義 明

例　　言

- 1 本書は、市営住宅名東第2団地の建替工事に伴う緊急調査の報告である。
- 2 発掘調査は、市住宅課の要請を受けて、市教育委員会社会教育課が実施した。
- 3 調査は、国の補助を受けて、昭和54年2月20日から3月31日まで行った。
- 4 本書の執筆は、第一章を河野幸夫・一山　典、第二章～第四章及び編集を一山が担当した。

目 次

第一章	位置と歴史的環境	1
第二章	調査に至る経過	4
第三章	調査の成果	6
	A 地区	6
	B 地区	6
	E 地区	10
	F 地区	10
第四章	小 結	13

挿 図 目 次

第 1 図	名東遺跡と周辺の遺跡	3
第 2 図	名東遺跡と周辺地形図	5
第 3 図	A 地区出土土器実測図	8
第 4 図	B 地区出土土器実測図	9
第 5 図	出土土錘実測図	10
第 6 図	名東遺跡出土弥生式土器①	11
第 7 図	名東遺跡出土弥生式土器②	12

図 版 目 次

図版 1	A 地区調査地点遠景, A 地区 SD - 02 ~ SD - 08
図版 2	B 地区 SB - 01 ~ SB - 04, B 地区 SD - 12 ~ SD - 14
図版 3	SB - 01 高環形土器出土状態
図版 4	土器出土状態
図版 5	E 地区弥生式土器出土状態
図版 6	D 地区調査地点遠景, F 地区 SB - 05, SD - 15
図版 7	SD - 01 土器出土状態
図版 8	SB - 01 炉跡, SB - 01 炉跡出土高環形土器
図版 9	SB - 03, SB - 02 弥生式土器出土状態
図版 10	SK - 02 弥生式土器出土状態
図版 11	SK - 01 弥生式土器出土状態

第一章 位置と歴史的環境

四国最大の河川である吉野川は徳島県の西から東に流れ、それを境として、南と北では地質的にも全く異なった様相を呈し、その吉野川の河口近くに南西から注ぐ支流の一つに鮎喰川が存在する。

鮎喰川の水源地付近の名西郡神山町には平形銅劍が出土している左右山遺跡¹⁾と東寺遺跡²⁾がある。

左右山遺跡は標高約 200 m の山腹部の急斜面で立雖の余地もないほどの場所である。又、東寺遺跡は、標高約 180 m の現在みかん畑となっている緩斜面に所在している。両遺跡は、鮎喰川を境にはば南北に位置している。

両遺跡から下って、鮎喰川が蛇行したその山腹部より銅鐸の出土した 2 つの遺跡がある。徳島市入田町安都真遺跡と国府町源田遺跡である。

安都真遺跡は、標高約 70 m の急な北斜面にあり、4 個の小形の 4 区画袈裟帶文銅鐸が発見されている。³⁾ また、源田遺跡は、北岸の溜池に面した緩斜面にあり、3 個の 6 区画袈裟帶文銅鐸と 1 口の細形銅劍が発見されている。⁴⁾ この両遺跡で特筆すべきことは、安都真遺跡出土 1 号銅鐸が岡山県種松山遺跡出土の銅鐸と同范である⁵⁾ことと、源田遺跡で細形銅劍と共に伴していることである。そして安都真遺跡の約 4.5 Km 東には 8 個の銅鐸を出土した上八万町星河内美田遺跡⁶⁾がある。このように、全国有数の銅鐸出土量を有する徳島県でも該地域が量的にも質的にも集中している点が指摘される。

この源田遺跡付近より鮎喰川は北へ向きをかえるが、西岸の丘陵部には 80 基にものぼる古墳群の所在する気延山東斜面となり、その山麓から平地にかけて集落跡である矢野遺跡（国府変電所遺跡）が展開している。⁷⁾ このように、徳島県下でも有数の古墳群があり、広大な集落跡をその基盤としてもっているのである。

以上述べてきたように、銅劍・銅鐸出土地、集落跡、古墳といった遺跡が、鮎喰川の両岸には対照的に並んでいるのである。この中に、鮎喰川東岸の沖積低地上に所在する集落跡が「名東遺跡」である。昭和 52 年度において、市営住宅建替工事に伴って発掘調査が実施された。⁸⁾

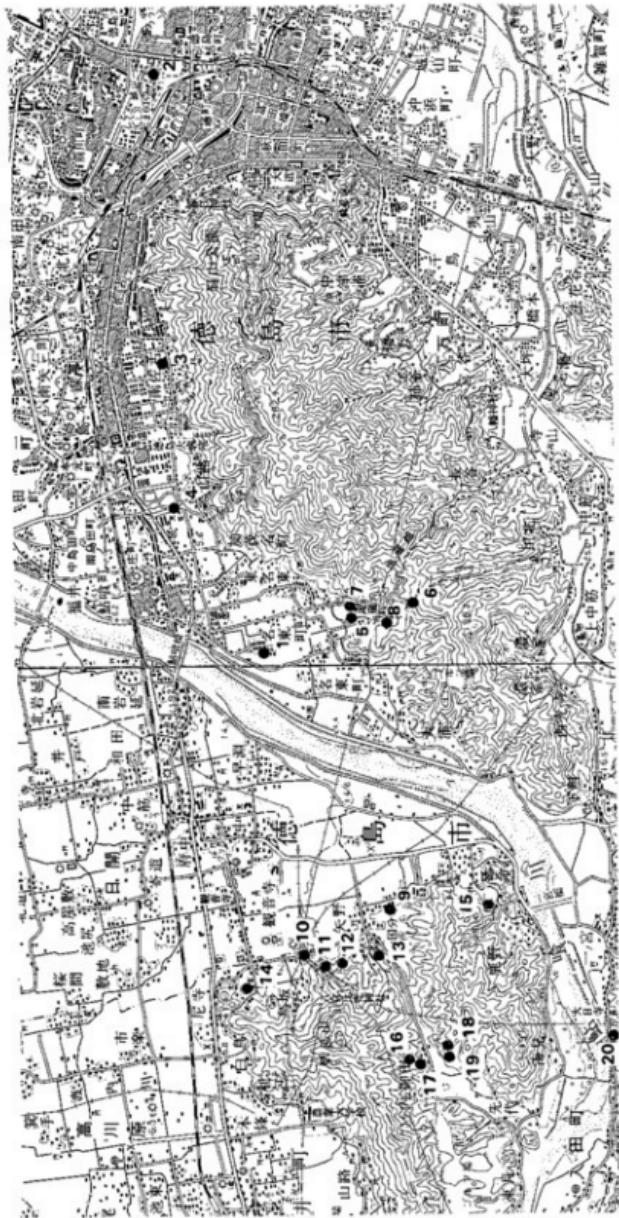
更に、眉山山系から少し東の方へも目を向けると、旧練兵場の庄遺跡⁹⁾、さらに東には南佐古浄水場遺跡¹⁰⁾といった縄文時代から弥生時代（さらに古墳～奈良・平安時代）の遺跡が存在している。そして眉山山系から東へ離れた城山にも、縄文時代～弥生時代の貝塚が形成されている。¹¹⁾

名東遺跡の南方の眉山北西麓の名東山を中心として、積石塚の前方後円墳である八人塚古墳（全長約 60 m）¹²⁾、古墳発生の問題解決のための鍵を握っていると思われる節句山 1・2 号墳¹³⁾、後期古墳の代表例である、うばのふところ古墳、穴不動古墳（いずれも内部主体は横穴式石室¹⁴⁾）などの名東古墳群が展開するとともに、名東廬寺・条里遺構の存在も考えられ、原始・古代の阿波の中心であった。

なお、名東遺跡の範囲は、徳島県立城東高等学校郷土研究部の分布調査報告によれば、東西約 500 m、南北約 600 m の範囲に土器片の散布がみられるといわれる。又、名東遺跡は従来の研究成果よりすれば、日枝神社付近を中心に、弥生前期～後期にかけての土器片が採集されているようである。

註

- 1) 村木幸雄「阿波国名西郡左右山出土の平形銅劍とその遺跡」『考古学雑誌』第30卷第3号 1940.3
三木文雄「平形銅劍出土の遺跡地に就いて」『考古学雑誌』第30卷第3号 1940.3
- 2) 沖野舜二「徳島県神山町下分東寺出土の銅劍」『考古学雑誌』第42卷第1号 1956.1
三木文雄「徳島県神山町下分東寺出土の銅劍 -補遺-」『考古学雑誌』第42卷第1号 1956.1
- 3) 三木文雄「阿波国安都真出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第50卷第4号 1965.4
- 4) 三木文雄「阿波國名西郡源田出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第36卷第2号 1950.2
- 5) 梅原末治『銅鐸の研究』 1927.7
杉原在介『日本古銅器の研究』 1973.3
- 6) 名東郡史編集委員会『名東郡史』 1971.7
天羽利夫・岡山真知子「第一編 原始・古代の徳島 二水稻農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻
総説編 1973.10
- 7) 徳島県教育委員会「矢野國府変電所緊急発掘調査概報 第1次調査 第2次調査」
徳島県教育委員会「矢野國府変電所緊急発掘調査概報 第3次調査」『徳島県文化財調査概報
1976年度』 1978.3
徳島市教育委員会「発掘調査の成果 弥生時代 矢野遺跡(第5次)」『徳島市文化財だより』
No.1 1978.9
- 8) 徳島市教育委員会「名東遺跡第一次調査概報」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第3集 1978.3
一山典「名東遺跡調査成果の概要」『徳島市史だより』第4号 1978.3
徳島市教育委員会「発掘調査の成果 弥生時代 名東遺跡(第1次)」『徳島市文化財だより』
No.1 1978.9
- 9) 天羽利夫・岡山真知子「第一編 原始・古代の徳島 二水稻農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻
総説編 1973.10
- 10) 森敬介「徳島市水道三谷瀧過池に於ける原始独木舟発見の顛末」上・下 『歴史と地理』第18巻
第1・5号 1926.1・5
森敬介「阿波國発見弥生式土器紋様との関係に就て」『考古学』第1巻第5・6号 1930.5
- 11) 烏居龍藏「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』第16巻第5号 1923.5
- 12) 末永雅雄・森浩一「徳島県徳島市肩山周辺の古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第九集
1966.3
- 13) 註12)と同じ。
- 14) 天羽利夫「終末期の古墳二基 - 穴不動古墳・矢野の横穴式古墳」『徳島県博物館報』 No.14
1972.3
天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第4集 1973.3



(縮尺 5万分ノ1)

第1図 名東遺跡と周辺の遺跡

- | | | | | | | | |
|----|---------|----|---------|----|-----------|----|----------|
| 1 | 名東遺跡 | 2 | 城山貝塚 | 3 | 南佐古淨水場遺跡 | 4 | 庄遺跡 |
| 6 | 八人塚古墳 | 7 | 不動古墳 | 8 | うばのふとこら古墳 | 9 | 阿波國分寺跡 |
| 11 | 矢野古墳 | 12 | 魔谷古墳 | 13 | 宮谷古墳 | 14 | 阿波國分尼寺跡 |
| 16 | 内ノ御田1号墳 | 17 | 内ノ御田瓦窯跡 | 18 | 内ノ御田2号墳 | 19 | 内ノ御田須恵窯跡 |
| | | | | | | 20 | 安都真遺跡 |
| | | | | | | | 前句山古墳群 |
| | | | | | | | 10 矢野遺跡 |
| | | | | | | | 15 源田遺跡 |
| | | | | | | | 20 安都真遺跡 |

第二章 調査に至る経過

徳島市名東町2丁目94～104に所在する市営の名東第2団地の建て替えに伴い、この地が「周知の遺跡」としての名東遺跡の一角を占めるので、事前調査の必要性が存在した。そのために、昨年度より緊急発掘調査を実施している。

前述したとおり、現在までに名東遺跡において確認されている土器は、ほとんど弥生時代中期から後期以降に比定されるものが多い。狩猟、漁撈、採集の三大生活形態とともに、水稻農耕が導入され、弥生中期以降になると農耕技術の進歩につれて、集落の数も増加し拡散する傾向を示すようになる。又、南に眉山、西に曾根川の地形の条件からみると、狩猟や農耕生活には絶好の地域として把握される。

調査は、 $2 \times 2 m$ のグリッドを設定して、工事対象面積について、全面発掘調査を実施した。

調査に先立ち、発掘調査団を編成して、昭和54年2月20日より調査を実施した。

名東遺跡発掘調査団構成メンバー

顧問	田中良平	(徳島市文化財保護審議会委員長)
	伊丹功	(徳島市文化財保護審議会委員)
	折目忠治	(徳島県教育委員会文化課長)
調査団長	富永義明	(徳島市教育委員会教育長)
調査副団長	山本忠男	(徳島市教育委員会社会教育課長)
調査主任	一山典	(徳島市教育委員会社会教育課主事、日本考古学協会員)
調査員	河野幸夫	(阿波郷土会副会長)
	石川重平	(石井町文化財保護審議会委員長)
	吉田俊夫	(徳島市教育委員会社会教育課社会教育主事)
調査補助員	林慎二	(竜谷大学生)
	大本二三治	中野達夫
	福川建一	福山哲人
	向井善則	村上哲史
	島弘	岡山桂弘
	鈴江裕伸	(以上徳島大学短期大学部生)

調査にあたり、水野正好氏(文化庁文化財調査官)に多大のご指導・ご助力をいただきました。

調査期間中には、阿子島功・天羽利夫・小林勝美・立花博の諸氏をはじめとする研究者の方々のご指導・ご助言をいただきました。又、新居和昭(竜谷大学院生)・福田宰大(國士館大学生)両君らのご協力をいただきました。記して、感謝の意を表す次第です。



第2図 名東遺跡とその周辺地形図

○調査地点

▲城東高校郷土研究部調査地点

×土器採集地点

●古墳 (1 節句山古墳群 2 穴不動古墳 3 うばのふところ古墳)

第三章 調査の成果

調査対象地は、A地区－水田、B～F地区－住宅地であり、調査面積は約1,200m²となっている。

A地区からは溝状遺構8(SD-01～SD-08)、土壌状遺構2(SK-01, SK-02)、B地区からは竪穴住居跡(SB-01～SB-04)、溝状遺構(SD-09～SD-14)、土壌状遺構(SK-01～SK-03)等、E地区からは中世の土壌状遺構(土壌墓)、F地区からは竪穴式住居跡(SB-05)、溝状遺構1(SD-15)などが検出された。

A 地 区

検出遺構

(1) 溝状遺構

SD-02はL-01～Q-06グリッドにかけて検出され、幅60cm前後、深さ約35cmで断面U字状を呈し、暗灰色白色土が充満しており、弥生式土器片が若干検出された。

SD-03は幅約1m、深さ約25cmを測り、SD-02の北方約3.5mに位置し、東側の部分ではSD-04と重複関係になっていた。

SD-05は幅約40cm、深さ5～16cmでゆるいカーブを描きながら、調査区の北東隅に検出された南北に走るSD-06と直交する形状を呈していた。

SD-06は幅約80cm、深さ約55cmで並行して東側にSD-07(幅約70cm、深さ約45cm)が走り暗灰色白色土が充満していた。

(2) 土壌状遺構

C-01・D-01・D-03・D-04グリッドを中心に土器の集積が認められ、土壌状遺構と思われ。高杯・壺・甕などの弥生式土器片が多數出土し、底部穿孔の土器片も認められた。

出土遺物

前述したとおり、弥生式土器片を中心に出土しているが、溝状遺構からは、古墳時代前期以降と思われる土器片が検出された。

B 地 区

検出遺構

(1) 竪穴住居跡

SB-01

径9m前後の円形プランを呈する竪穴住居跡であり、小礫混在の暗褐色土が充満しており、多類の土器片を検出している。

SB-02

径5m前後の円形プランを呈する堅穴住居跡であり、小礫混在の黒色土が充満しており、多数の土器片が出土している。なお、両者は重複関係となっている。

SB-03、SB-04はいずれも鷹丸の方形状のプランを呈する堅穴式住居跡であるが、東側の一部のみの検出であり、詳細は不明である。

(2) 溝状遺構

SB-01の南側に2条(SD-01、SD-02)と北側約8mにSD-03があり、更に1.5m離れてSD-04が検出され、SD-05はSD-04の北方約1.7mに位置し、SD-06に南接している。

北側のものはいずれも幅60~80cm、深さ20~30cmで東西方向に走っていた。A地区のSD-02と同一方向、SD-06、SD-07と直交する形状を示し、関連性は強いが伴出遺物がほとんどないので、詳細は不明である。なお、SD-04とSD-05の間に土器の集積部が認められ、土師器・須恵器片などが出土している。

(3) 土壙状遺構

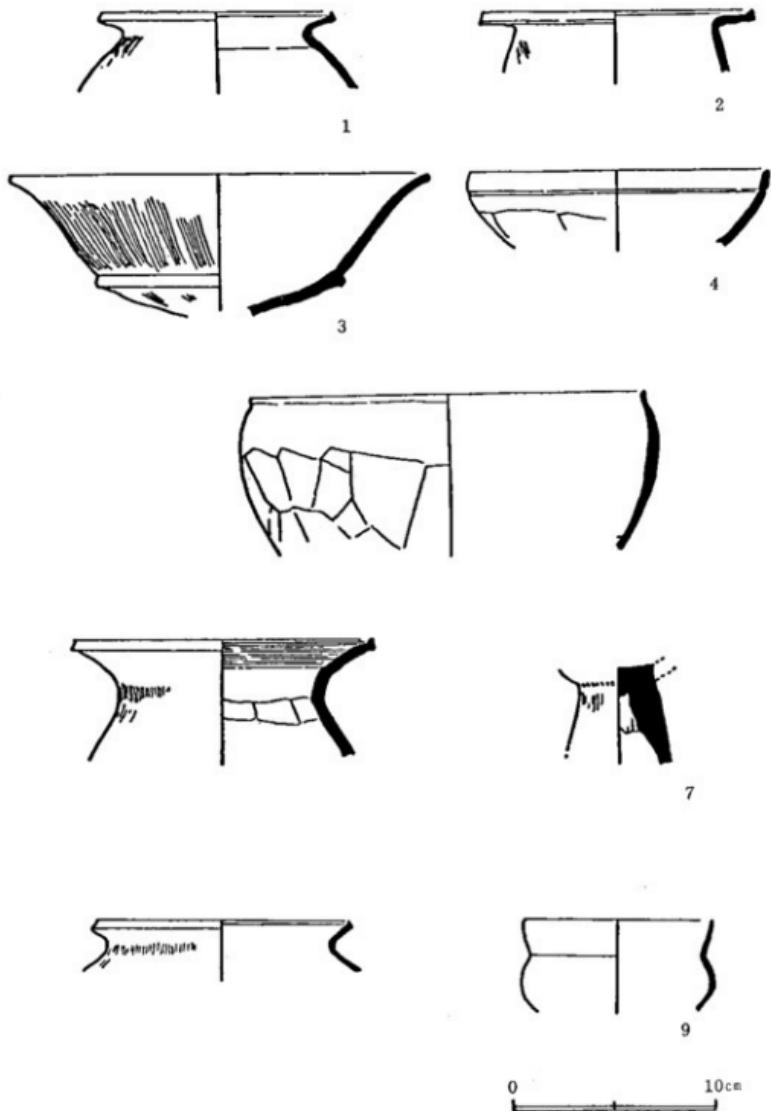
SB-01と重複関係になっており、長径2~2.5m×短径1.1mの長方形のプランを有していた。

(4) 土器窯

調査区の南東隅付近に検出されたもので、弥生中期~後期の土器片が廃棄されていた。

出土遺物

全般的には、名東町Ⅲ式(弥生中期末葉)以降の弥生式土器片が大部分であった。その他の遺物としては、若干数の土師器・須恵器の破片とともに、小型の土錐などが検出された。

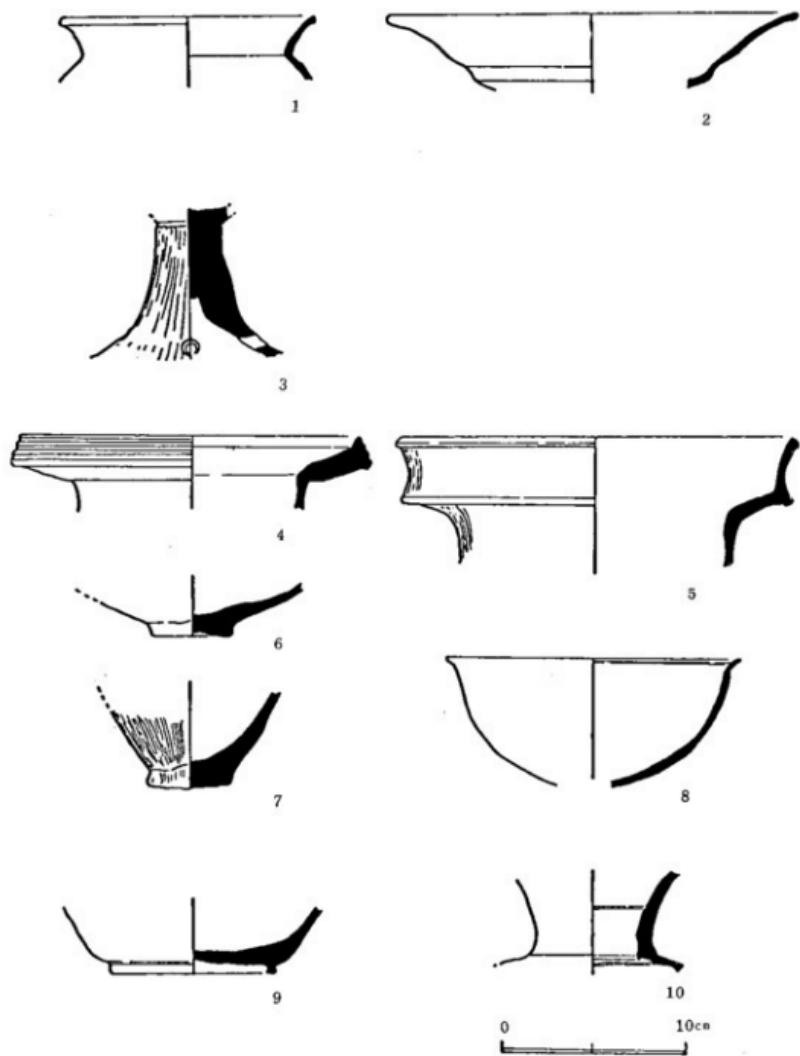


第3図 A地区出土土器実測図

1~5 SK-01

6・7 SK-02

8・9 SD-03



第4図 B地区出土土器実測図

1~3 SB-01

4~8 土器番り

9・10 溝状遺構 (10は須恵器)

E 地 区

検出遺構

(1) 土壇状遺構

部分的な検出のみであり、土師質系土器が数点出土している。時期的には平安時代末～鎌倉時代にかけての所産と思われる。

出土遺物

調査区の南端付近より、若干の弥生式土器片が検出された以外には、上記の环形土器が出土している程度である。

F 地 区

検出遺構

(1) 壁穴住居跡

SB-05

調査区の北端に、径6m前後の不正円形のプランを有し、壁の残存高は約20～30cmを測る。中央部を、溝状遺構（SD-15）によって切断されている。

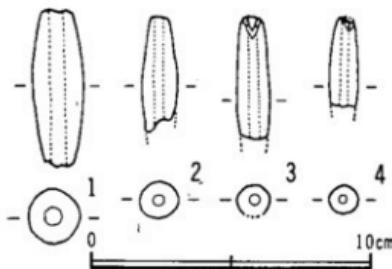
(2) 溝状遺構

SD-15

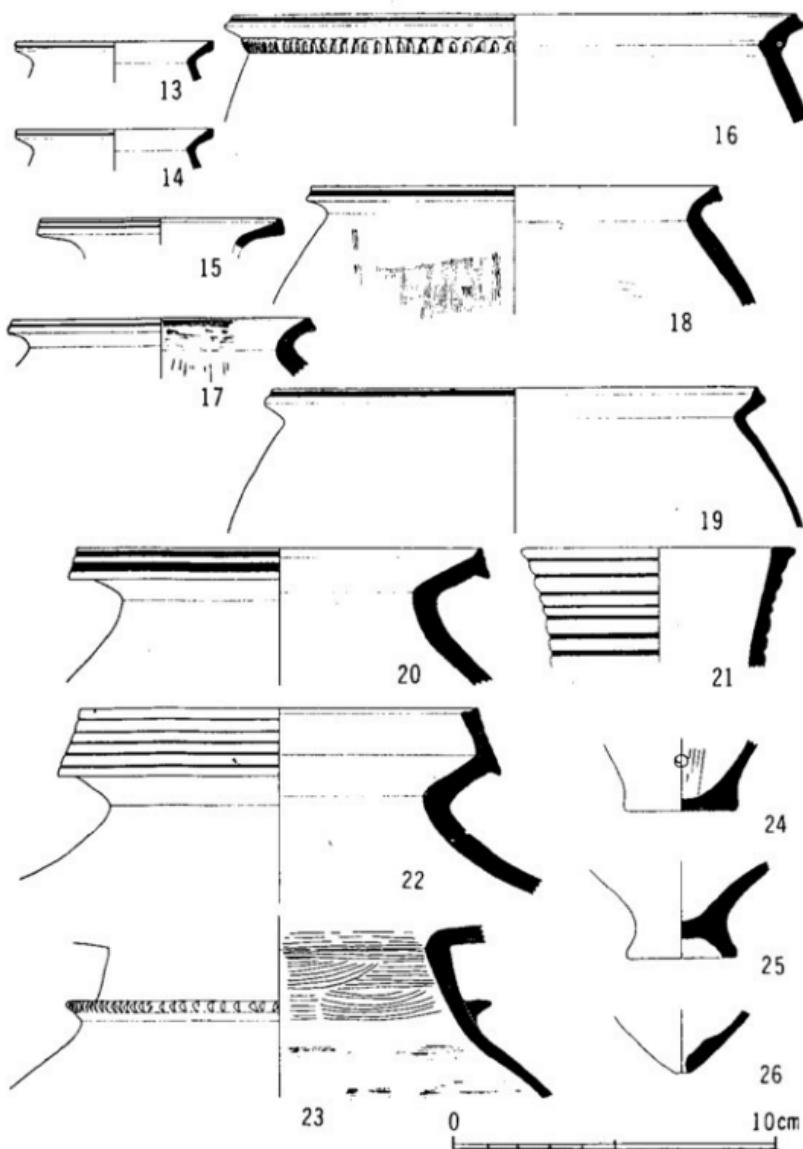
幅約40cm、深さ約30cmを測り、ゆるやかなカーブを描く形状を呈する。

出土遺物

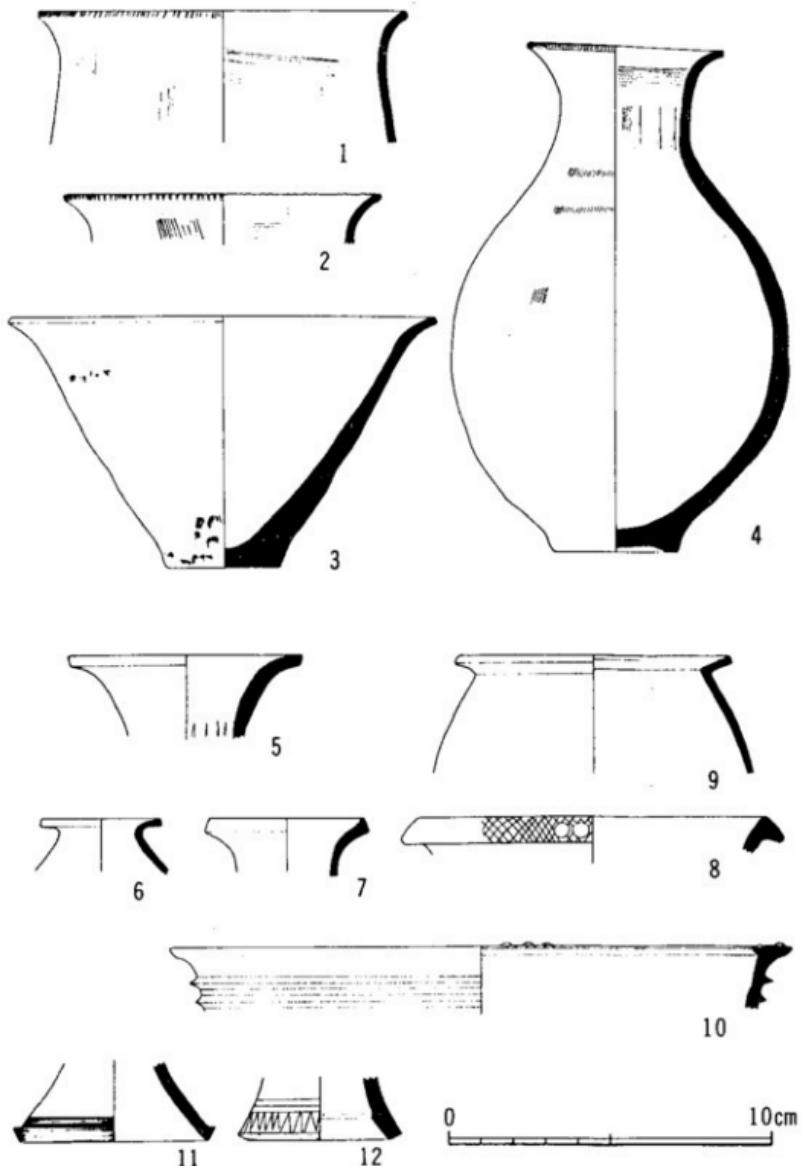
SB-05からは、弥生時代中期の所産と考えられる土器片が出土し、SD-15も出土点数は少ないがほぼ同時期に比定されると思われる土器片が検出されている。



第5図 出土土錐実測図



第6図 名東遺跡出土彌生式土器①



第7図 名東遺跡出土彌生式土器②

第四章 小 結

弥生時代になると、狩猟・漁撈・採集の三大生活形態に依存していた縄文時代から、水稻農耕の技術導入により、鉄器・青銅器・織物技術などの文化体系のもとで、採取経済から生産経済へと変換していくのである。

この技術導入は食糧生産の計画性を可能にし、自然物に依存していた生活に比較して、はるかに安定した生活を獲得することができたのである。

紀元前300年頃に北九州を門戸として大陸文化の導入があり、紀元後300年頃まで続き、土器編年をもとにして、前期・中期・後期の3時期の大区がなされている。

徳島市内の場合、弥生前期には、縄文時代後・晩期より引き続き生活の場であった城山貝塚、南佐古淨水場遺跡などが存在し、縄文時代の生活形態をも遺存させていたようである。¹⁾

弥生中期になると、吉野川及びその支流である鮎喰川下流域を中心に大規模な集落が形成されるようになってくる。

旧練兵場を中心とした庄遺跡²⁾(現在の徳島大学薬学部、蔵本公園グラウンドから眉山の山裾に展開する)、鮎喰川西岸の国府変電所を中心に気延山裾野一帯に展開する矢野遺跡³⁾とともに、鮎喰川東岸の名東町一帯の沖積低地上に展開する名東遺跡などが代表的なものとしてあげられる。⁴⁾

昨年度の発掘調査により、名東遺跡の一角の性格究明がなされ、弥生中・後期以降における鮎喰川東岸地帯における古代集落跡の解明の端緒がつけられた。その成果と今回の調査成果をふまえて、若干の問題点をあげて、結びとしたい。

第1・2次調査を通じて、竪穴住居跡5、溝状遺構15、土壙状遺構6などが検出されている。又、調査区の中でもA・C～F地区は教高地上、B地区は中位面に所在し、北側は埋没浅谷となっており地形的な面からも、遺跡の最北端の可能性が大である。⁵⁾

なお、溝状遺構には条里制遺構との関連も考えられるものも存在するが、伴出遺物が皆無であり、断定的な資料を獲得することができなかったのは遺憾である。

名東遺跡の場合は、

- ① 日枝神社付近を中心とした地域においての本遺跡の性格究明の諸問題
- ② 名東古墳群への発展過程の諸問題
- ③ 鮎喰川西岸の矢野遺跡との関連及び気延山古墳群との関係に関する諸問題
- ④ 名東廃寺、条里制遺構との関連に関する諸問題
- ⑤ 検出遺構の諸問題
- ⑥ 出土遺物の諸問題
- ⑦ 遺跡の存続年代に関する諸問題

などがあげられる。

従来の調査成果からは、弥生時代中期末葉に比定されている「名東町Ⅱ式」以降⁶⁾の土器が中心に

採集されているが、今回の調査においても同様の成果となっている。

なお、名東遺跡の場合は、南佐古淨水場遺跡 → 庄遺跡 → 名東遺跡の変遷過程が想定され、矢野遺跡の場合はこのような変遷過程が現状では不明である。⁷⁾ (一山 典)

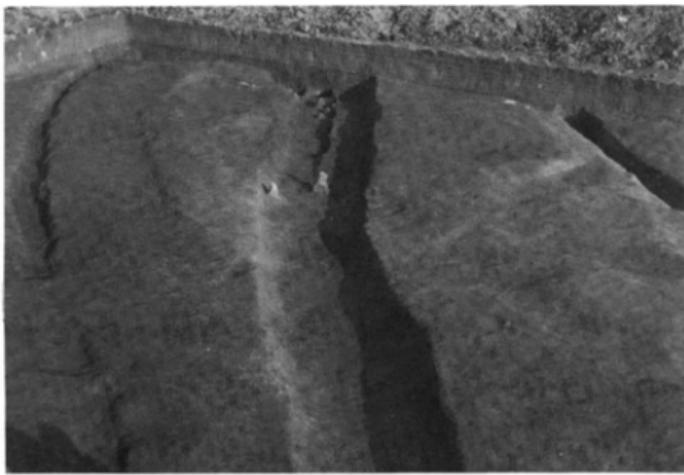
註

- 1) 烏居龍藏「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』第16巻第5号 1923.5
- 森敬介「徳島市水道三谷瀧過池に於ける原始独木舟発見の顛末」上・下 『歴史と地理』第18巻第1・5号, 1926.1・5
- 森敬介「阿波国発見弥生式土器紋様との関係に就て」『考古学』第1巻第5・6号 1930.5
- 2) 天羽利夫・岡山真知子「第一編 原始・古代の徳島 二水稻農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻 総説編 1973.10
- 3) 徳島県教育委員会「矢野國府変電所緊急発掘調査概報 第1次調査 第2次調査」『徳島県文化財調査概報 1976年度』 1978.3
- 徳島県教育委員会「矢野國府変電所緊急発掘調査概報 第3次調査」『徳島県文化財調査概報 1976年度』 1978.3
- 徳島市教育委員会「発掘調査の成果 弥生時代 矢野遺跡(第5次)」『徳島市文化財だより』No.1 1978.9
- 4) 天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開—序論—」『徳島県博物館紀要』第5集 1974.3
- 徳島市教育委員会「名東遺跡第1次調査概報」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第3集 1978.3
- 一山典「名東遺跡調査成果の概要」『徳島市史だより』第4号 1978.3
- 徳島市教育委員会「発掘調査の成果 弥生時代 名東遺跡(第1次)」『徳島市文化財だより』No.1 1978.9
- 5) 阿子島功・黒田晃司「低地の微地形と海水準変動(3)」『徳島大学学芸紀要』第27巻 1978.3
- 6) 岡本健児「入門講座・弥生土器 —四国 4」『考古学ジャーナル』No.92 1974.3
- 岡本健児「入門講座・弥生土器 —四国 5」『考古学ジャーナル』No.93 1974.4
- 7) 天羽利夫・岡山真知子「第一編 原始・古代の徳島 二水稻農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻 総説編 1973.10

図 版



A 地 区 調 査 地 点 速 景 (西南より)

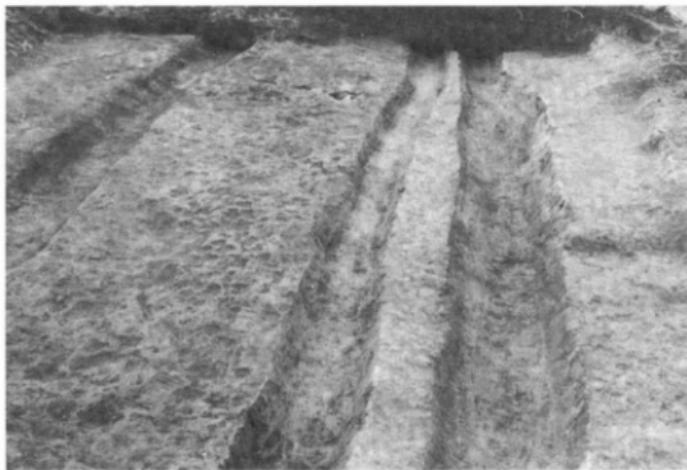


A 地 区 SD-02～SD-08 (西より)



B 地 区 SB-01～SB-04

(西より)



B 地 区 SD-12～SD-14

(東より)



SB-01 高環形土器出土状態



土器溜り 漏生式土器出土状態



土師器甕形土器，土錘



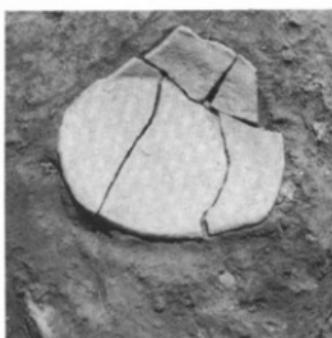
土師器甕形土器



土師器甕形土器



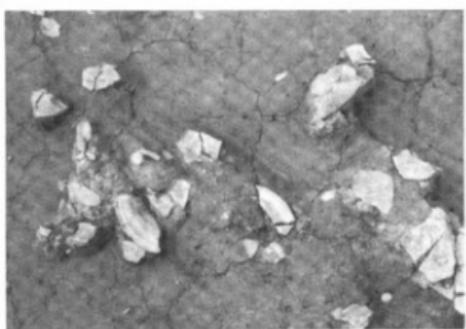
土師器坏形土器



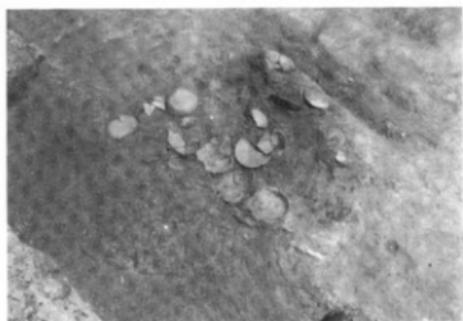
土師器坏形土器



土師器高台付坏形土器



E 地区 彌生式土器出土状態



E 地区 SK-06 土器出土状態



E 地区



D地区 調査地点遠景 (東より)



F地区 SB-05, SD-15 (西より)



SB-01 漢生式土器出土状態



SD-01

彌生式土器出土状態



SD-01 彌生式土器出土状態



SD-01 彌生式土器出土状態

SB-01 爐跡 (右)



SB-01
爐跡出土高環形土器
(下)





SB-03

(西より)



SB-02 漢生式土器出土状態



SK-02 漢生式土器出土状態



SK-02 漢生式土器出土状態



SK-01 漢生式土器出土狀態



SK-03 壺形土器出土狀態

徳島市埋蔵文化財調査報告書

<第5集>

名東遺跡第2次調査概報

昭和54年3月31日

編集 徳島市教育委員会

発行 徳島市教育委員会

印刷 グラント印刷

